The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Finnegans Wake における錬金術師Shem の糞便学的創作行為
Author(s)	宮原, 駿
Citation	Osaka Literary Review. 2016, 54, p. 19-34
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/54720
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

Finnegans Wake における錬金術師 Shem の糞便学的創作行為

宮原　　駿

> . . . the first till last alshemist wrote over every square inch of the only foolscap available, his own body, till by its corrosive sublimation one continuous present tense integument slowly unfolded all marryvoising moodmoulded cyclewheeling history (thereby, he said, reflecting from his own individual person life unlivable, transaccidentated through the slow fires of consciousness into a dividual chaos, perilous, potent common to allflesh, human only, mortal) but with each word that would not pass away the squidself which he had squirtscreened from the crystalline world waned chagreenold and doriangrayer in its dudhud. (185-86)

序章

James Joyce の最後の小説、*Finnegans Wake* には糞尿や排泄行為への言及が横溢している。これまでの *Finnegans Wake* のスカトロジー研究において、第 1 部第 7 章の文筆家 Shem や第 2 部第 3 章のロシア軍将軍と Buckley の挿話が注目されてきた。[1] 特に前者は作者 Joyce の自伝的な枠組みの中で読み解く試みや Shem の収集癖に着目する研究が多く、*Finnegans Wake* の中でも単独で着目されることの多い章である。[2] 実際、第 1 部第 7 章はスカトロジー的観点から本作品を論じる際、第一に着目するべき箇所であると言える。なぜなら、第一に、この章程疑いの余地なく明確に糞便が登場している箇所は他には見受けられないからである。しばしば論じら

れるロシア軍将軍と Buckley の挿話においても、排泄行為への言及はあるものの Joyce 独自の鞄語によってその明示性は幾分和らげられている。また、これから論じていくように、この章の Shem の創作行為において扱われる排泄物、または、排泄行為は、章の主題である Shem の人生と深い関わりを持つものであり、一つの章全体に渡って重要な要素となっているスカトロジー的言質は他の箇所には見られないからでもある。

冒頭に掲げた一節は第 1 部第 7 章からの引用である。これは芸術家 Shem が自身の身体と自らの糞尿で拵えたインクで作品を作り出していく場面であり、先行研究においても特に注目されてきた。例えば、William Sayers は Shem の創作行為を作品におけるもう一つの“commodius vicus of recirculation”であるとし、作品の循環構造の小型だとみなしている（158）。また、Andrew Mitchell は神の世界創造を排泄行為と結びつける。彼は“maker”と“made”という概念を導入し、創造主と創造物が一つになるものとして Shem の創造行為を分析している。Shem が自らの排泄物と自身の身体を使って作品を作ることが、“maker”と“made”が一体となる“self-creation”を成しているとするのである。さらに、Shem の創造行為を含む、作品全体のスカトロジー的言質に関して、Catherine Whitley は歴史を国の排泄物として捉え、国家や個人のアイデンティティに関わるものとして論じている（81）。彼女によれば Shem は自身の糞便をより一般的な糞便、国家の歴史へと溶け込ませる。この時、彼女は Shem の糞便を彼の物語として捉えている節がある（95）。宮田恭子は作品の錬金術に関する言及に着目し、「排泄物という低次元のものから高次元の異質の物質インクを作るシェムの行為」を「錬金術的である」とし、中世の実際の錬金術との類似について説明している（226）。

先行研究では Shem の創造行為を構造的に捉えたり、社会という大きな枠組みの中におけるアイデンティティの問題と結びつけたりする試みがある。しかし、「物語の枠内において」また「Shem 自身にとって」、彼の創

作行為や排泄物が具体的に何を意味しているのかということはあまり論じられてこなかった。[3] 特に、Shem が錬金術師であることと彼の創作行為との関連性についてはあまり触れられることはなかった（宮田も Shem の錬金術と中世の錬金術との類似を指摘することに止まっている）。本稿は、先行研究では見過ごされてきたこれらの点を見直し、Shem の視点から彼の創作行為を捉え直す試みである。

まず、第 1 章では作品の第 1 部第 7 章における排泄物が象徴するものを明らかにする。そして、第 2 章では Shem が錬金術師であることの意味を考えるために、錬金術師がどのような機能を果たしているのかを分析する。最後に、第 1 章と第 2 章で明らかになったことを踏まえて、第 3 章では Shem が排泄物からインクを作って遂行する創作行為の意味を考察する。

第 1 章

Shem の排泄行為は、彼自身の排泄物を自らの身体に還元するという特異性においてしばしば論じられている。これまで、この排泄行為は作品の循環構造や Shem の芸術行為の自己完結性などと結びつけて考えられてきた。しかし、排泄物そのものに関しては論じられてこなかった。排泄物よりも、むしろ Shem の家に散らばるガラクタについての言及が多かった（Patrick W. Moran は彼の収集癖について論じている）。興味深いのは宮田によるガラクタへの言及である。彼女は「シェムの部屋を埋めるガラクタ」が「経験という日々」を意味し、Shem は錬金術によって「それら日常の卑近なものを輝かしい永久の生命に変え」るのだとする（227）。しかし、作品中で錬金術の材料に使われるのは彼の糞尿であり、ガラクタではない。実際はガラクタではなく、Shem の排泄物が宮田の言う「経験という日々」を意味しているのだろう。しかし、その意味するところは未だ曖昧である。本章では Shem の排泄物の意味するところが何であるかを探求

する。

Shem の章とも言われるこの第 1 部第 7 章では、Shem の双子の兄弟、Shaun が語り手であり、章全体を通して Shem を非難している。Shaun の非難の言葉によく現れる言葉に“lowness”がある。これは Shem の低劣さを非難する言葉であると同時に、彼の排泄物について考える時、見逃してはいけない要素でもある。“Shem was a sham and a low sham and his lowness creeped out first via foodstuffs.”（170）、とあるように、Shaun は Shem の低劣さを食物と結びつけている。Shem の低劣さ（“lowness”）は食物を介して這い出てくる排泄物であることが示唆される。“first”からわかるように、彼の低劣さの原型として彼の糞尿は表れる。糞尿は低劣さと結び付けられることで、負のイメージを帯びることになるのである。

排泄物が象徴する Shem の低劣さが何に由来するかということは、Shaun がこの章を通じてしていることを見てみればわかる。Shaun は Shem が債権者を抱えていたこと（172）や人々の罵倒から逃げ出して引き籠ったこと（176）、彼の排泄物を用いた創作行為（185-86）などをあげつらい、非難する。全く、ばらばらであるようでありながら、Shaun が非難することは全て Shem の人生のことである。ほとんど 1 章分を使って Shaun が非難の言葉を浴びせることから、Shem の人生が非難されるようなことに満ちていることが見て取れる。

また、Shem 自身も自分の人生について語ろうとしていることが描写される。“[Shem] begin to tell all the intelligentsia . . . the whole lifelong swrine story of his entire low cornaille existence”（173）。このように、Shem は知識人たちに向かって、自分の人生全体について語り始める。その人生は彼の低劣な存在の嫌な（“swrine” < swine）物語であり、負の歴史である。こうした Shem の様子を Shaun が語っているために、Shem が彼の人生について語る真意は見えない。しかし、自身の負の歴史について語ることで、Shem が何をしようとしているのかということには議論の余地がある。

実際、Shem がこの章で唯一自分の言葉で話す箇所には次のようにある。“MERCIUS (of hisself): *Domine vopiscus!* My fault, his fault, a kingship through a fault!”（193）。彼自身の慈悲は語り始めてすぐに、過ちについて叫ぶ。これは Shem の心が自らの過ちのことで満たされていることを表している。また、冒頭に掲げた引用において“his own individual person life unlivable”（186）とあるように、彼の人生は生きられないようなものでもある。さらに、章を通して、Shaun が Shem の人生を非難していたことや Shem 自身がまるで赦しを乞うかのように自分の過ちだらけの人生を語ることからも鑑みて、章全体の主題が Shem の過ちに満ちた人生、彼自身の負の歴史であることが推察できる。

Shem の負の歴史としての人生は彼の排泄物と密接なかかわりを持つ。序章でも言及したように、Whitley によれば、*Finnegans Wake* における歴史とは国家が前に進む際の消化器官の蠕動から生み出されるものである。つまり、歴史とは国家の排泄行為から生じたそれの排泄物である。(81) 彼女の考え方は Shem の章にも応用できる。Shem の人生を彼の歴史と考えるのであれば、Whitley の文脈における国家は Shem に置き換えが可能である。言い換えれば、人生とは Shem の排泄行為から生じた彼の排泄物なのである。加えて、Whitley は Kelly Auspaugh に言及しながら、次のように言っている。“Excrement is a very necessary byproduct of living, yet, as Kelly Auspaugh discusses, it implicates the borders of life, representing as it does dead matter, or death-in-life, which must be left behind.”（93）。排泄物は生には欠かせない副産物でありながら、その中に死を孕み、後ろに捨て置かれるべきものなのである。Shem の排泄物は生の中の死であり、捨て置かれるべきものである。しかし、この排泄物が Shem の人生であるとするのであれば、それは彼の人生の負の側面に相当すると考えられるのである。

このように、この Shem の章の主題は彼の負の歴史、人生の負の側面で

あり、彼の排泄物はそれを表象するものであることがわかる。彼の排泄物は彼が人生を生きる中での消化器官の蠕動によって排出されたものであり、通常は捨て置かれるべきものである。しかし、彼は創作活動においてそれを捨て置こうとはしない。積極的に材料として用いるのである。こうした彼の創作活動の意味を解き明かすためには、まず彼が錬金術師（“alshemist”[185]）であることの意味を考える必要がある。

第 2 章

Shem の章において、Shem は通常、芸術家、もしくは、文筆家として扱われることが多い。特に、作者 Joyce と Shem を同一視する批評においてはこのような文脈で読まれることがほとんどである。しかし、唯一この章では、Shem は“alshemist”（185）とも呼ばれる。それは、本稿の冒頭に掲げた一節の中においてである。Shem の創作活動の様子を描写するときになって初めてこの呼称が用いられるのである。したがって、排泄物を使う Shem の創作行為を考える際、この“alshemist”（<alchemist + Shem）、つまり、錬金術師が果たす機能について明らかにする必要がある。

錬金術への言及は作品全体に散在している。しかし、中でも重要なのは“The tasks above are as the flasks below . . .”（263）、という一節である。これは錬金術の基本思想であり、上と下の照応関係を示すものである。[4] 錬金術は卑金属を貴金属に変え、低次元のものを高次元のものへと変える試みである。このように、下から上へという方向性を一つの性質としてもつ錬金術であるが、ここではさほど重要ではない。方向性ではなく、むしろ錬金術の上と下を結びつけるという機能に注目したい。

この上下をつなげるという錬金術の機能は、この章全体の傾向と照応する。とはいえ、Shem の低劣さをあげつらう箇所では「下」の要素ばかりになってしまっている。これは Shaun が Shem を非難しているという語りの形式上仕方のないことである。しかし、Shaun の思惑とは関係のない

箇所においてはこの傾向が浮き彫りになっている。特に、Shem の家のガラクタが羅列されている箇所において顕著である。

> The warped flooring of the lair and soundconducting walls thereof, to say nothing of the uprights and imposts, were persianly literatured with burst loveletters, telltale stories, stickyback snaps, doubtful eggshells, bouchers, flints, borers, puffers, amygdaloid almonds, rindless raisins, alphybettyformed verbage, vivlical viasses, ompiter dictas, visus umbique, ahems and ahahs, imeffible tries at speech unasyllabled, you owe mes, eyoldhyms, fluefoul smut, fallen lucifers, vestas which had served, showered ornaments, borrowed brogues, reversibles jackets, blackeye lenses, family jars, falsehair shirts, Godforsaken scapulars, neverworn breeches, cutthroat ties, counterfeit franks, best intentions, curried notes, upset latten tintacks, unused mill and stumpling stones, twisted quills, painful digests, magnifying wineglasses, solid objects cast at goblins, once current puns, quashed quotatoes . . . (183 underlines mine)

Shem の家の捩れた床にも音を導く壁にもあらゆるガラクタが散らばっている。これらのいくつかは上と下に分けることができる。例えば、“almonds”や“raisins”は食物であり、続く“verbage”（<garbage）の対極にある。前者が上で後者が下である。また、“fallen lucifers”と“Godforsaken scapulars”は悪魔と神という相反するものが見られる。天上にいる神と堕ちた悪魔の関係は明らかに上と下である。このように、乱雑なガラクタの中に一緒になって上と下に属するものが含まれている。しかし、中には上とも下とも判然としないものも含まれている（“burst loveletters,”“telltale stories,”“stickyback snaps”など）。さらには、上と下が混合

しているものもある。例えば、“family jars”は家族が代々受け継いできた大切な壺だと解することもできるが、この一覧の中のいくつかの不潔なイメージや“painful digests”による連想によって、尿瓶にも解すことができる。こういった無作為さの中にはこれら両極の者の間に境界線を設けないという意思、つまり、上と下を結び付けようとする意図が見られる。

しかし、この対極する上下をつなぐ錬金術は上と下だけでは終わらない。実際、Mitchell は Shem がインクを身体に塗りたくることに言及して、自然と人工の合一する“self-creation”を指摘している。また、この章のはじめでも対立する二つが Shem の人生への言及において象徴的に現れる。“. . . every honest to goodness man in the land of the space of today knows that his back life will not stand being written about in black and white”（169）。このように、Shem の人生は白と黒に分けて記述することができない代物である。上と下、自然と人工、白と黒などが対立関係にあるのである。

Shem の章において、対立する二つの要素は数多く登場するが、どれも二つが合一しようとしており、二つ別れている状態を良しとしない。特に、Shem の創作行為を描写する本稿冒頭の引用の場面でもインク（黒）を Shem の身体（白）に塗ると、“doriangrayer”（灰色）になる。錬金術師 Shem の創作の場面において、白と黒は合一する。つまり、この章における錬金術師の機能とは対極にあるもの同士の境界線を壊し、両者を合一させることにある。

以上の議論から、対立するものを結びつける錬金術の機能が明らかになった。前章での議論を思い返せば、錬金術が Shem の人生の正の部分と負の部分を結びつける可能性に思い当たる。Shem の章の主題は Shem の人生であり、その人生の負の側面は彼の排泄物である。そして、Shem はその排泄物と錬金術を使って創作を行う。したがって、次章で彼の創作行為の意味を考える時、これらのことが重要になってくるのである。

第３章

本章では、Shem の創作行為が彼にとって何を意味するかについて考察したい。その際、語り手 Shaun が描写する Shem の創作行為と実際の Shem の意図する創作行為を分けて考えることが重要になってくる。しかし、本論に入る前に本稿の議論にいくらかの類似性を持つ先行研究に触れ、相違点を明確にする。

Shem の創作行為は序章で簡単に述べたように、これまで様々に解釈されてきた。Sayers は Shem が創作行為において経験を自らの身体に書き戻していると述べる（157）。これはインクを人生と同一視する点において、先の議論と類似するが本稿ではインクを人生の負の側面に限定する。さらに、Sayers はこの経験を書き戻す行為を循環構造に帰することに止めている（157）。

また、Philip　Kitcher はシェムの創作行為は彼の部屋のガラクタや排泄物を芸術へと変える、人生を秩序だてる行為であり、人生のすべての側面に従事することであるとしている（117）。しかし、ガラクタも排泄物も通常無価値と判断されるものであり、これらと格闘することを人生のすべての側面に従事することとすることはできない。Kitcher が主張していることは、むしろ Shem がこういったガラクタや排泄物と向き合わなかった場合、人生の全側面とは向き合えないということであろう。つまり、ガラクタや排泄物は人生の別の側面であり、通常は背を向ける類のものである。こういった人生の負の側面を表象するものとして、Kitcher はガラクタと排泄物を示すが、それは誤りである。Shem の家には実際多くのガラクタが散らばっているものの、Shem が創作に用いるのは排泄物の方だけである。ガラクタは排泄物とは違い、Shem が生産したものではなく、彼の人生と見なすことはできないからである。

Shem の創作行為について考える前に、語り手 Shaun を吟味する必要がある。Shaun は Shem の双子の兄弟であるが、Shem とは対立関係にある。

とりわけ、この Shem の章ではひたすら彼を非難しており、Shaun が語る Shem 像はかなり偏見を含むものであることが予期される。実際、Shaun の Shem に対する敵意や蔑視は Shem がインクを作る時の描写の仕方にも表れている。

> *Primum opifex, altus prosator, ad terram viviparam et cunctipotentem sine ullo pudore nec venia, suscepto pluviali atque discinctis perizomatis, natibus nudis uti nati fuissent, sese adpropinquans, flens et gemens in manum suam evacuavit* (highly prosy, crap in his hand, sorry!), *postea, animale nigro exoneratus, classicum pulsans stercus proprium, quod appellavit deiectiones suas, in vas olim honorabile tristitiae posuit, eodem sub invocatione fratrorum geminorum Medardi et Godardi laete ac melliflue minxit psalmum qui incipit: Lingua mea calamus scribae velociter scribentis: magna voce cantitans* (did a piss, says he was dejected, asks to be exonerated), *demum ex stercore turpi cum divi Orionis iucunditate mixto, cocto, frigorique exposito, encaustum sibi fecit indelibile* (faked O'Ryan's, the indelible ink). (185)

Shaun は Shem がインクを作る行為を普通の英語で書くことは憚られると述べて、わざわざラテン語で描写するのである。この荘重な描写は、括弧による挿入が盛りたてる滑稽さも相まって皮肉たっぷりであり、Shaun の悪意を浮かび上がらせている。こうして、Shaun の描写の悪意に気づくと、次に挙げる描写も額面通りには読めなくなる。

> . . . when he [Shem] found himself . . . at pointblank range blinking down the barrel of an irregular revolver of the bulldog with a purpose pattern, handled by an unknown quarreler who, supposedly, had been told

> off to shade and shoot shy Shem should the shit show his shiny shnout out awhile to look facts in their face before being hosed and creased . . . (179)

この描写の中でShemは銃で狙われていることに気づくが、この銃を持っている不審人物（“an unknown quarreler”）に注目したい。Shaunの説明に従えば、この人物は身を潜め、Shemを狙撃するようにという指令を受けている。しかし、Shaunの悪意を考慮するならば（この一節の中でもShaunはShemを“shit”と同一視し、蔑視している）、この一節の中の“supposedly”という単語に注意が向くはずである。わざとらしく挿入されたこの単語は文字通りに取れば、この人物がそういった指令を受けていたかどうか、Shaunがはっきりとは認識していないのだと理解できる。しかし、実際はこの人物は、Shemに対して敵意を抱いているShaunが差し向けた刺客であり、それをごまかすための“supposedly”であると解することも可能である。また、一方でその人物自体がShaunであるとすることもできる。この人物を表現する「口げんかする人」（“quarreler”）、という表現はShemと対立するShaunを連想させるからである。以上のように、この章の語りはShaunのShemに対する悪意によって、バイアスがかかったものであり、一義的に理解することはできない。そういった意味で、語り手Shaunは信頼できない語り手であると考えられる。

Shaunが信頼できない語り手であるとすると、Shaunが語るShemと実際のShemとの間に差異が生じる。正確には、Shaunが認識するShemの行動の意味が実際とは異なっている可能性があるということである。次に挙げる場面は人々の罵声から逃げ出すShemを批判する描写である。

> . . . a rank funk getting the better of him [Shem], the scut in a bad fit of pyjamas fled like a leveret for his bare lives . . . pursued by the scented

curses of all the village belles . . . kuskykorked himself up tight in his inkbattle house . . . there to stay in afar for the life . . . (176)

Shaun の説明によれば、Shem は臆病風に吹かれて不格好なパジャマ姿で逃げだし、家に閉じこもってしまう。この描写において焦点を当てられるのは Shem が人々から逃げて家に閉じこもることであるが、この後 Shem がこの家で創作活動をすることを考えると別の意味が見えてくる。Shem の視点から考えれば、家に閉じ籠って行う創作活動は苦闘である。それは、この引用に表れている、“inkbattle house”（inkbattle < inkbottle + battle）にも窺える。つまり、Shaun から見れば、ただ逃げ出した臆病者としてしか映らない Shem であるが、実際はこの“inkbattle house”こそ彼の戦場なのである。

Shem の創作活動が彼の苦闘であるとしたが、この戦いが苦しいものである理由は彼がインクを排泄物から作ることと関係している。尿と糞便からインクを作り出す Shem であるが、この行為には激しい痛みが伴う。なぜなら、彼は淋病（169. 18）に罹っており、加えて、便秘（184. 36）でもあるからである。[5] 淋病に罹ると排尿時に尿道に激しい痛みを感じる。便秘に関しても同様である。創作活動において、激しい痛みを伴うことを認識することで、Shaun が非難する Shem の創作活動の汚い様子も違った様相を呈してくる。Shem にとって、この活動は非難されるようなものではなく、むしろ苦しい戦いなのである。

これほどの痛みに耐えてまで、インクを作り出し遂行しなければならない Shem の創作活動が意味するところは彼が“alshemist”であることを思い出すとわかりやすい。錬金術の役割は上と下を結びつけることである。Shem の創作活動を芸術活動の枠内で考えた場合、排泄物を芸術へと昇華するこの活動は低次元のものを高次元のものへと結びつけるものであることがわかる。Moran は Shem が価値のないものを潜在的に価値のあ

るものへと変えたとする（441）。創作行為においてShemは、価値のないもの（排泄物）を価値のあるもの（芸術）へと変えるからである。これは無価値なものを価値のあるものに仕立て上げようとする行動と見なすことができる。そうした行動の深層には無価値であるはずの排泄物を苦労して受け入れようとするShemの心理があるのである。実際この活動においてShemは排泄物からできたインクを自らの身体に受け入れる。そして、錬金術により結び付けられた二つは、先にも述べたように“doriangrayer”、灰色になる。本稿冒頭に掲げた一節からわかるように、Shaunに言わせれば、灰色というのは色が褪せた（“waned”）結果であり、創作行為そのものも失敗（“dudhud”（<dud））である。しかし、Shem自身にとっては全く異なる意味を持つのである。彼が受け入れた排泄物は彼の人生の負の側面を象徴するものであり、Shemにとって創作活動は錬金術を媒介にして、人生の負の側面を受け入れる儀式なのである。

しかし、Shemが人生の負の側面を象徴する排泄物を受け入れることにはさらに大きな意義がある。このことを考える上で、Mikhail Bakhtinの次の言葉は示唆に富む。「…彼（ユーゴー）は排泄物のイメージの再生、復活の要素を無視してしまっている。この要素はすでにヨーロッパの文学意識の中では失われてしまっていたのであるから」（134）。これは彼のRabelais論の中の一節であり、ヨーロッパ中世においては排泄物に再生や復活などのイメージがあったが、近代に入ってこの正のイメージが失われたことが述べられている。このような観点からShemの創作行為を見てみたい。彼の創作行為は排泄物を使用するため、近代以降の価値観から見れば否定的なものであり、Shaunの非難の対象となることは免れない。しかし、排泄物は潜在的には再生や復活の要素を含む。この中世的な価値観がShemにとっては重要である。なぜなら、彼は錬金術師であるからである。錬金術は中世に最も栄えたものであり、中世の代名詞といっても過言ではない。したがって、Shaunにとっては非難する対象でしかない排泄物も

Shem にとっては二面性をもつものなのである。つまり、Shem は人生の負の側面を表象する排泄物を受け入れることで、再生、または、復活することができるのである。

本章では Shem の創作行為の意味を語りの性質と絡めて追求した。これまで論証してきたように、作品第 1 部第 7 章における Shaun の語りは信頼に足るものではない。Shem のあらゆる行動の描写が Shaun の悪意からかなり歪んだものになっていたことがわかるからである。このことを踏まえると、本稿の主眼である Shem の創作行為の意味も自然と様相を異にする。Shaun から見れば、Shem の創作行為は糞尿に塗れており非難すべき行為であるのだが、それは Shem にとっては自身の人生の負の側面を受け入れるという大切な儀式である。彼はこの儀式を通して、再生、つまり、生まれ変わることができるのである。

結論

以上の議論から、Shem の創作行為は排泄物をその身に受け入れることで、人生の負の側面を受け入れ、再生／復活に向かう儀式であることが明らかになった。これは Shaun が言うような非難されるべき行為ではなく、逆に称賛に値する行為である。Shaun は錬金術師 Shem とは違い、排泄物の真の意味を理解していなかっただけである（たとえ理解していても、Shem への悪意のために真実を描写したかどうかは疑わしい）。しかし、中世的価値観を体現する錬金術師 Shem には排泄物の正の意味が念頭にある。つまり、錬金術師 Shem が対極するものを結び付けるという錬金術の機能を理解していることは当然のことであるが、それと同時に、錬金術師という彼の呼称は、排泄物の正の意味を理解できるのが Shem だけであることを示す重要な符号でもあったのである。

また、本論稿は第 1 部第 7 章にのみ焦点を当てた。先にも述べたように、最も明示的かつ章全体に渡る重要性を持つ排泄物／行為がこの章に表れて

いるからである。しかし、この章について論じることで *Finnegans Wake* 全体のスカトロジーの性質を明らかにしたと断ずることは難しい。他の箇所における排泄物／行為の働きは、本稿での Shem の芸術行為に関する解釈では明らかに説明のつかないものであり（実際ロシア軍将軍と Buckley の挿話における排泄する人物は軍人であり、錬金術師 Shem とは似ても似つかない）、各所において異なった意味を持っているように見える。したがって、個々の箇所のスカトロジー的言質は今後さらなる研究を必要としている。特に、第 1 部第 8 章は従来スカトロジー的な注意をあまり喚起してこなかった。この章は本稿で扱った章に続く章であり、噂話をする洗濯女二人の会話から構成される。彼女たちの洗っているものの中には主人公 HCE の下着も登場し、それは黒く汚れている。女たちが洗濯をする川の水は洗濯物の汚れを呑み込み流れて行くのである。この章の語り手である彼女たちに注意を払いながら、解釈するべき重要なスカトロジー的場面である。

注

1　Andrew J. Mitchell はロシア軍将軍の排泄行為と Shem のそれとを対照させる。

2　作家の自伝的枠組みにおける読解に関しては、横内一雄の「自我の上へ亡命して：『フィネガンズ・ウェイク』第 1 部第 7 章におけるシェムのメランコリックな幼年期」、また、Shem の収集癖に関しては、Patrick W. Moran の“An Obsession with Plenitude: The Aesthetics of Hoarding in *Finnegans Wake*”を参照のこと。

3　Whitley は Shem の排泄物と彼の物語“his own story”（95）を同一視するかのように論じるが、二つを合わせて Shem が創作に用いていると述べるにとどまっているようにも思われる。どちらにせよ、彼の糞便の性質については探求していない。また、彼の創作行為の意味について、一般的な歴史の中に彼個人の物語を組み込む行為であるとする。しかし、これも物語枠内における Shaun が彼を非難する文脈との関連性が希薄である（95）。

4　宮田恭子『ジョイスと中世文化』を参照のこと。

5　Shem が性病に罹っていることは主人公であり彼の父でもある HCE の罪が性的なものであるらしいことと照応する。

参考文献

Joyce, James. *Finnegans Wake*. 1939. London: Penguin, 1992. Print.

Kitcher, Philip. *Joyce's Kaleidoscope: An Invitation to* Finnegans Wake. Oxford: Oxford UP, 2007. Print.

McHugh, Roland. *Annotations to* Finnegans Wake. Baltimore: The John Hopkins UP, 1980. Print.

Mitchell, Andrew J. "Excremental Self-Creation in *Finnegans Wake*." *Hypermedia Joyce Studies* 5.1 (2004): n. pag. Web. 6 July 2015.

Moran, Patrick W. "An Obsession with Plenitude: The Aesthetics of Hoarding in *Finnegans Wake*." *James Joyce Quarterly* 50. 1-2 (2012): 433-52. Print.

O Hehir, Brendan and John M. Dillon. *A Classical Lexicon for Finnegans Wake: A Glossary of the Greek and Latin in the Major Works of Joyce*. Berkeley: U of California P, 1977. Print.

Sayers, William. "The Russian General, Gargantua, and Writing of 'Wit's Waste.'" *Joyce Studies Annual* (2008): 146-162. Print.

Whitley, Catherine. "Nations and the Night: Excremental History in James Joyce's *Finnegans Wake* and Djuna Barnes' *Nightwood*." *Journal of Modern Literature* 24.1 (2000): 81-98. Print.

バフチン，ミハイル.『フランソワ・ラブレーの作品と中世・ルネサンスの民衆文化.』杉里直人訳，東京：水声社，2007.

宮田恭子.『ジョイスと中世文化：「フィネガンズ・ウェイク」をめぐる旅.』東京：みすず書房，2009 年.

横内一雄.「自我の上へ亡命して：『フィネガンズ・ウェイク』第 1 部第 7 章におけるシェムのメランコリックな幼年期.」『英文學研究』82 （2005）：31-44.